

2018年7月号までライシテの歴史を追ってきたが、1901年のアソシエーション法などを経て1905年の「教会と国家の分離法」に至る一連の流れは、その後の趨勢を決めたという意味で画期的であった。この時期のライシテの特徴を三つ挙げると、一つ目は、宗教が国家体制から分離した制度になったことである。「極端な場合には、宗教は、社会的にアソシエーションのように機能することもある」(ジャン・ボベロ, p.76)。アソシエーションとは、二人いれば設立できる、誰にでも作れる結社だ。当時のフランスには今でいう世界宗教しかなかったと言っても過言ではないだろうが、その宗教が誰にでも作れる小集団と同列に置かれうるようになったのである。二つ目は教会に客観的必要性がなくなったこと。かつて教会は社会に存在すべきもので、それなしに市民生活は考えられなかった。しかし、聖職者の政治活動は禁止され、公教育や医療制度が、教会に代わり社会的必要性を満たすとされた。三つ目は宗教選択と無信仰の自由である。今後、市民は気兼ねなく宗教を選び、また拒否することもできる。こう考えると、私たち現代人の感覚に近くなってきているのが分かる。事実、1901年と1905年の法律は現行法である。

しかし百年以上前の当時、これらが直ちに市民レベルで浸透しなかったことは容易に推察できる。自由に宗教を選べるといっても、周囲の目が気にもなっただろうし、長年培った家族の伝統や体裁もあっただろう。公教育の道徳観から一気に宗教性が消え去ったとも断言できないだろう。事実、1905年以降もあらゆる面で論争がやまなかった。

そんな中、1914年に第一次世界大戦がはじまり、「聖なる同盟 Union sacrée」のもとフランス国のために共闘するという感情が芽生えた。イヴ・ブルレーの言葉を借りれば「地獄のような塹壕の中では社会的、文化的、宗教的な壁に大した意味はなくなる」。前線には様々な背景を持つ兵士がいた。アブラハム・ブロックという大ラビが志願してヴォージュ地方の戦地に赴いた。激しい戦闘の中で倒れたある兵士が最期に十字架が欲しいと懇願したため、ラビがキリストの十字架像を見つけてきて彼に与えたところに、両人の頭上で爆弾が炸裂、ともに戦死した。そこにはその最期のいきさつを見届けたイエズス会兵士の姿があった。このように、宗教者たちはそれまで接することのなかった一般兵たちと時を共にし、兵士たちは反教権主義者が刷り込んだ否定的なイメージと異なる、武器をもって戦う宗教者たちの姿を目にして、宗教の違いやわだかまりを越え、生死や苦痛を共にする仲間たちの団結がみられたのである。

激しい戦闘が兵士たちの宗教心を呼び起こすこともあった。血の代償で守られる愛しい国は神聖視され、苦痛や贖罪、犠牲といった精神性がキリストや聖人を想起させることもあった。また戦地に赴かないものは、教会へ行って出征者の生還を祈り、あるいは戦死したもののために共に涙した。まさに挙国一致といったところだろうか。

国内のカトリック教会はともに戦う仲間であったが、ローマ教皇の中立的な立場はフランスでは好意的に受け取られなかった。クレマンソーは皮肉を込めてベネディクト15世を「ドイ

ツ人の法王」と揶揄した。歴代フランス王が戴冠式を行ったランス司教座聖堂が爆撃で焼け落ち、フランス国民団結のシンボルとなっても、法王は公式の弾劾声明もなしに、ドイツ側に破壊行為を止めるよう呼びかけたにすぎず、フランス人の感情を逆なでした。そのため、1919年の終戦の際、和平交渉においてバチカンが蚊帳の外に置かれた。

バチカンと共和国の冷え切った関係の修復に役買うことになったのが、ジャンヌ・ダルクである。彼女はすでに19世紀以降、共和派からはカトリック教会に見放された悲運の救世主、そして愛国心の象徴として崇められ、右派や教会側からは清純なる殉教者とみなされるようになっていた。愛着を込めて Pucelle d'Orléans (ピュセル・ドルレアン、オルレアンの乙女) と呼ばれる彼女は、1909年ピウス10世によって列福され、1920年5月16日にベネディクト15世によって列聖された。その直後1921年には在バチカン仏大使の任命、同年在仏バチカン大使館設置承認と続いた。フランス・イタリア・バチカン三国の外交的理由もあって1904年以來ぎくしゃくしていた関係が、ここに復活した。もちろんジャンヌ・ダルクの存在だけが理由ではないだろうが、19世紀から20世紀初頭にかけてフランス国内で、共和派と教会の両者の橋渡し役のようにジャンヌ・ダルクがクローズアップされたことは、当時の雰囲気を知るうえで興味深いと言えよう。一例として、19世紀後半に建てられたリヨンのフルビエール・バジリカ聖堂内にある六面のモザイク画の一つは、リヨンとは無関係ながらジャンヌ・ダルクをテーマにしている(該当するモザイク画は1917年作)。

この大戦中に、一つの新たな問題が発生している。これまで存在感のなかったイスラムである。フランスのために戦ったイスラムのアフリカ兵戦死者をどのように弔うのか。戦中からすでに葬儀をイスラムの手で行うとか、記念碑を建てるといった構想が練られていたが、その流れからパリの大モスクが生まれた。イスパノ・モレスク様式のモスクは33メートルの高さのミナレットを備え、1926年7月15日、共和国大統領臨席のもと盛大に落成式が行われた。いかなる宗教にも補助金を出さないという1905年法にも関わらず、公費が投入された。こうしてフランスのために命を投げ出した数万人(戦死者数はデータによって7万人から10万人と幅がある)のイスラムへの敬意が公然と示された。

[参考文献]

Yes Bruley, *La laïcité française*, Edition du Cerf, 2015, pp. 125-215.

Jean Baubérot, *Histoire de la laïcité en France*, PUF, 2010, pp.71-104.

ジャン・ボベロ『世界の中のライシテ』、白水社、2014年、75～78頁。

谷川稔『十字架と三色旗』、岩波現代文庫、2015年、210～237頁。

工藤庸子『宗教 VS 国家』、講談社現代新書、2007年、174～189頁。

伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学』、勁草書房、2014年、255～310頁。